

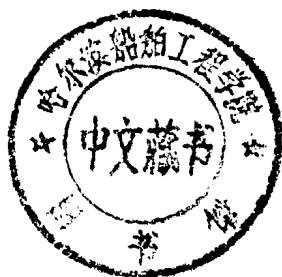
大学院生のための
日本語



高等教育出版社

研究生用 日语

金宗哲 主编
麻然秋 王永盛
张久柱 合编



高等教育出版社

(京)112号

この本は日本国国際交流基金日本語教育センターの教材制作援助
助成金により出版したものである

责任编辑 尹学义 祝大鸣

DW29/54-12

研究生用

日语

金宗哲 主编

麻然秋 王永盛

张久柱 合编

*

高等教育出版社出版

新华书店北京发行所发行

高等教育出版社激光照排技术部照排

国防工业出版社印刷厂印装

*

开本 850×1168 1/32 印张 11 字数 280 000

1992 年10月第1版 1992年10月第1次印刷

印数 0001—3 832

ISBN7-04-003942-7/H·436

定价 5.25 元

序 文

このテキストは理工学科において日本語を第一外国語とする研究生(大学院生)を対象に作ったものである。日本語教育の発展につれ、学生のレベルもたかくなっているので、研究生までくると、基礎知識はくりかえし習ったものだが、活用が問題になっていると思われる。一貫して日本語教育現場で研究生の日本語教育に携わってきた者として、教科書の必要性を痛感し、編集を企画したのがこの本になったものである。

このテキストは年間カリキュラム(第一、二学期中)、授業時数約124~144時間をかけて終了することを想定して編集している。テキストは精読用本文、新出単語、用例、文法、練習、速読、それに構造上の特徴を示す文型を盛り込み、日本語の構文と複文の構造の徹底を期した。

引用した文章は、すべて新しく発行された科学技術書類、雑誌などから取ったもので、科学技術の最新発展の傾向を示す文章で、科学技術分野での専門用語、外来語、文型などを習得させる一方、科学技術の仕事に携わっている者にとって欠せない常識についても触れさせようと図ったものである。そのほか、論文と文章の書き方、技術交流のための口頭表現などにも注意を払った。「文法」は国立国語研究所の『日本語の文法』(下)と国際交流基金の『教師用日本語教育ハンドブック』を参照して、複文の構造について述べてみた。

このテキストは哈爾賓工業大学(金宗哲)、哈爾賓電氣工程学院(麻然秋)、東北林業大学(王永盛)、東北農業学院(張久柱)など四校が協力して編集した。編集にあたり、哈爾賓工業大学の日本

語教研室の王玉晶,金玲,滕佳傑さんにお世話になった。黒竜江大学日本語学部の刘耀武教授と日本の専門家松山美顔氏が校閲され,氏からご助言を頂いた。ここでお礼申し上げる次第である。

終りに,本書は日本国の国際交流基金日本語国際センターの日本語教材制作援助助成金交付を受けて出版したものである。日本国国際交流基金日本語教育センター,それに仲介の労を頂いた日本国駐華大使館広報文化部の方々にも心からお礼申し上げます。次第である。

1991年8月3日

編者から

目 次

第 1 課	現代の人間関係.....	1
	文法:並列関係の表し方(一)	6
	速読:人間関係と人間開発.....	13
第 2 課	人間こそ主役	20
	文法:並列関係の表し方(二).....	26
	速読:人間を知るために.....	32
第 3 課	科学知識の生まれるプロセス	37
	文法:並列関係の表し方(三).....	42
	速読:科学文明の中の人間.....	47
第 4 課	現代科学の性格と状況	52
	文法:接続詞と副詞による並列関係.....	58
	速読:現代科学の性格と状況.....	65
第 5 課	科学技術の過去と現在	71
	文法:文末表現(一)「判断」	76
	速読:理論は遅れてやってくる	82
第 6 課	新技術の誕生	87
	文法:文末表現(二)「断定」	91
	速読:新技術の誕生.....	97
第 7 課	先端技術の実用化こそ.....	103
	文法:文末表現(三)「必然的帰結」	110
	速読:日本の甘えはもう通用しない	115
第 8 課	情報化社会への発展.....	121
	文法:従属関係(総論)	125
	速読:作文の基礎	129
第 9 課	情報と制御の関係.....	137
	文法:従属関係(因果)	142

	速読:フィードバックとは	149
第 10 課	システム計画の項目	155
	文法:従属関係(目的).....	160
	速読:文書の書き方.....	164
第 11 課	英科学誌特派員がみた日本の科学	172
	文法:従属関係(条件).....	177
	速読:英国では技術者が低く見られる.....	184
第 12 課	イメージによる思考	191
	文法:従属関係(方式).....	198
	速読:イメージによる思考.....	203
第 13 課	大型研究開発とエネルギー	208
	文法:従属関係(譲歩).....	215
	速読:研究計画の目的.....	221
第 14 課	四つの力は統一できるか	229
	文法:従属関係(時)1	236
	速読:大きく変わった思考心理学	241
第 15 課	言葉がわかるコンピューター	246
	文法:従属関係(時)2	254
	速読:夢から現実の世界へ.....	261
第 16 課	惑星旅行はいつ可能になるか	268
	文法:慣用文型のまとめ.....	274
	速読:一年以上の長旅.....	280
第 17 課	科学の未来	285
	文法:外来語のまとめ.....	297
第 18 課	今後の課題	305
	文法:科学技術用語のまとめ口語表現と文章表現	314
	速読:今後の課題.....	319
附 録	新出単語総表	327

第 1 課

* 本文

現代の人間関係

加藤秀俊

記号と人間関係

人間は記号を自由に操る動物である。我々は手紙を読んだり、電話をかけたり、落語を聞いて大笑いしたり、一通の電報を受け取ってぼう然としたりというように、記号に反応しながら暮らしている。そして我々は、記号を使って互いに理解し合い、うちとけ合いながら人間関係を深めていく。記号を交換し合うことなしに成立する人間関係というものは、ほとんど想定できない。何遍も往復する手紙、何遍も繰り返されるデート、そしておしゃべり、会議。それが友人関係であれ、取り引き関係であれ、およそ人間関係というものは、記号、とりわけ言葉の交換をとおして成立するものだ。記号を抜きにして、人間関係を論じることは不可能なのである。

近代社会、とりわけ二十世紀後半の社会での人間関係は、記号送達手段の進歩のおかげでずいぶん便利になった。例えば、電報、電話、印刷物、ラジオ、そしてテレビなどの記号送達手段の進歩は、我々にずいぶん恩恵を与えている。しかし反面、この機械や近代の通信制度の発達には、未知の知り合いという不思議な人

間関係を我々の間につくってしまった。実際、現在の我々を振り返ってみると、意外に「未知の知人」が多いのに驚く。政治家だの作家だの芸能人だのを、我々はこちらから一方的によく知っている、有名人だけではない。仕事のうえで、手紙や電話だけで知っている「未知の知人」を我々はたくさん持っており、事実、ビジネス社会では、かなりの程度まで未知のままで用を足すことができるのである。

しかし、そうはいってもきわめて重要な決断を伴うような人間関係の場合は、ビジネス社会でも、生身の人間どうしの接触という形をとることが多い。電話のほうが能率的だということで、セールスマンかお客の家に電話をかけて商談がすべて成立するかどうか。ほんとうに大事なことについて話し合うときには、機械による記号送達ではいっこうに効率があがらない。生身の人間どうしがひざを突き合わせてでなければどうにもならないのだ。

機械による記号送達は、生身の人間どうしの関係の代用という役割を果たしているはずなのに、どうして生身の人間どうしが会わなければならなくなるのか。それは、人間関係を成立させるための有力な手がかりである記号が、人間のすべてを表すものではないからである。記号は人間のごく一部を、不十分にしか反映しないのである。

経験的に我々はそれを証明することができる。例えば、会議の議事録のたぐいを、実際に会議が行われた何日かあとに読みしてみる。速記は正確である。一語一句、会議の話し合いはきちんと文字によって記録されている。だが、その会議を実際経験した人間にとっては、議事録はなんとなく物足りない。物足りないというよりは、むしろ議事を正確に伝えていないような印象をさえ与える。実際の会議はもちろん、言葉のやりとりが中心である。しかしその言葉には、生きた人間どうしでなければわからない微妙な調子の違いがある。熱心に語られる言葉、あんまり気乗

りのしない調子で語られる言葉、素直な言葉、皮肉な言葉——その場に居合わせた人間は、そういう生きた言葉の意味の流れを経験する、ところが議事録は、そういう生きた言葉の持っている細かい意味のひだを再生してはくれない。議事録に現れてくるのは、むしろそういう意味のひだをローラーにかけてぺっしょんこにした文字だ、文字を見ていただけでは、その時、実際に進行していた人間関係はわからない。一つ一つの発言の間に生まれる沈黙の意味なども文字にはならない。一人一人の参加者の表情や態度も文字にはならない。議事録はついに会議そのものにはなり得ないのである。

確かに機械的な通信の技術や制度の発達には、驚くべき便益をもたらしてくれた。だが、生身の人間から離れた記号は、全人格的な人間の触れ合いを可能にするものではない。人間が互いにほんとうに深い部分まで理解し合おうとするなら、やはり生身の対話が必要なのである。

光村図書 「現代国語」から

* 新出単語

1. 操る[あやつる](他五) 操纵, 掌握
自由に操る/精通
2. ぼう然[茫ぜん](形動タルト・副) 茫然, 模糊
3. ～というように 像…的, (诸如)…这样的
4. 打ち解ける[うちとける](他下一) 解开, 融洽
5. ～ことなしに (慣用型) 不…, 没…; 不…, 而…
(同ことなく)
6. デート[date](名) 日期, 年月; (口语) 约会
7. おしゃべり[お喋り・お饒り](名・自サ・形動) 饶舌, 爱说话

8. 取り引き[とりひき](名・自サ) 交易
9. とりわけ[取り分け](副) 特别,尤其
10. 抜く[ぬく](他五) 去掉,取消
～を抜きにして/省去…,不计…
11. 振り返る[ふりかえる](自五) 回顾(过去),向后看,回头看
12. 知人[ちじん](名) 相识,熟人
13. ビジネス[business](名) 商业,事务
14. 用を足す[ようをたす](词组) 办完事
15. 生身[なまみ](名) 肉体,有生命的身体
～の人間/有生命的人类、活生生的人
16. セールスマン[salesman](名) 推销员
17. いっこう[一向](副)(下接否定) 全然,一点也…
18. 突き合わせる[つきあわせる](他下一) 使(彼此)对面,对证,查对

膝を～せて話す/促膝谈心

19. どうにも(副)(下接否定) 不管怎样也…
～…ない/无论如何也不…
20. はずなのに(惯用型) 本来应该…,可是…
21. 手がかりて(惯用型) 抓手,线索
22. たぐい[類い](名) 类,同类
23. きっちり(副) 恰,正好
24. 物足りない[ものたりない](形) 不太充分的,不能令人十分满意的
25. やりとり[遣り取り](名・他サ) 交换,互换
ことばの～(词组)/交谈
26. 気乗り[きのり](名・自サ) 感兴趣,愿意,高兴
27. 素直[すなお](名・形动) 纯朴,坦率
28. 皮肉[ひにく](名・形动) 讽刺,挖苦
29. 居合わせる[いあわせる](自下一) 在场

30. 流れ[ながれ](名) 流,流水;演变
 31. ひだ[襞] (名) (衣服的)褶;差异
 32. 再生[さいせい](名・自他サ) 再生,改造,再现
 33. ローラー[roller](名) 滚转物,滚轮,压路机
 34. そのもの(接尾)(接体言及形容动词后表示)所指的事物本身

きこう おんけい ちんもく びみょう べんえき
 記号 恩恵 沈黙 微妙 便益

* 用例

1. …というように

(1)計画を立てたり,データをとったり,修正を行ったりというように一連の作業を行う。

(2)飛行機に羅針盤をつけ,高度計をつけ,無線電をつけたりというように装備を増やしてきた。

(3)対象がはっきりしない内に,名前をつけたり定義をしたりといったようにあいまいな概念を作り出すことになる。

2. …なしに

(1)コンピュータなしにオートメーション化を実現させるということは想像もできない。

(2)大都会の中心部には例外なしにビジネスセンターということで大きなビルが立ちならんでいる。

(3)廃棄物を分類することなしに捨ててしまうと,その処理が大きな問題になる。

(4)情報科学を研究することなしに管理技術を向上させることはとうていできない。

3. …いっこうに…ない

(1)病気は一向によくならない。

(2)彼は一向に勉強しないので、困るんですよ。

(3)論文は一向に進まないで、困っているところです。

(4)一向に原因を調べないものだから、失敗するのも理の当然である。

4. …とすれば(ようにするなら)

(1)そういう状態になっているとすれば、少しおかしいのではないか。

(2)どんな研究の結果でも客観化できるとすれば、社会の発展にもっと貢献することができる。

(3)技術が独立で勝手に歩き始めるとすれば、人間のコントロールがなくなってしまう。

(4)家庭への情報サービスが実現できるとすれば、社会のシステム化が起るということである。

5. …を抜きにして

(1)合理であるかいはぬきにして、まず可能について検討する必要がある。

(2)コンピュータを抜きにしてロボットや人工知能を論ずることは不可能である。

(3)情報の質をぬきにして、伝達量だけを問題にすることはできない。

(4)生身の人間の対話を抜きにして情報伝達を論ずるのは大きな間違いである。

* 文法

並列関係の表し方(一)

1. 総論

日本語の「文」は文節成分を組み合わせて成すものであ

る、文節を組み合わせて文とするには、それぞれ一定の「きまり」があるが、その関係を大きく三分類することができる。

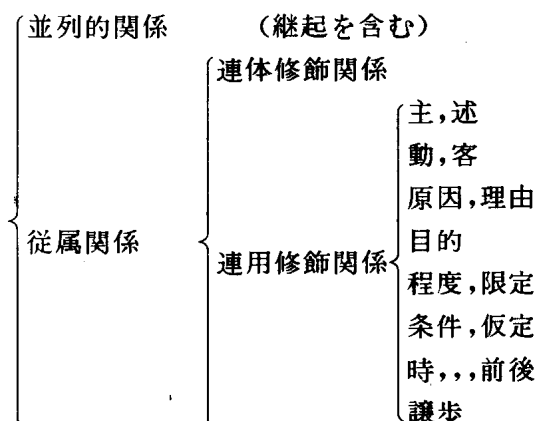
(1)独立語

(2)並列関係

(3)従属関係

いわゆる「連語」も複文も2,3の関係から成り立つものと考えてよい。

節と節との意味的關係をもっと詳しく分類すると次のようである。



2. 体言の並列的接続

並列的接続といっても「ただ並べる」だけでは成立しない。いくつかの制限があるが、主要な点をあげてみると

(1)対象が同じでなければならない。

(2)同じムードのものであること。

(3)動詞の場合、同じテンスになること。

(4)同じ述語をもつ二つの文は、一定の条件があれば、一体化する、などである。

体言の並列的接続關係を表すには、次のようなものをよく使う。

①並列助詞(と、や、やら、とか、だの(の)に、か、なり)

②接続詞(および、ならびに、あるいは、または、もしくは)

③慣用文型(だけでなく、ばかりでなく、ところか、…も…も、…であろうと、…であっても、…といい、…といわず、…にしろ…にせよ、にしても、につけ)

④(…、…、…)でも表すことがでもる。

難しいのはいくつかの用法の使い分けであるが、主なものについて少し説明を加えることにしよう。

①お茶とパンをください。

②お茶やパンなどをください。

③お茶やらパンやらたくさんいただきました。

・ (物事を列挙する場合)

④お茶なりコーヒーなり早くください。

(大概に指す意味で物事を並列して、その一つを選択するのに用いる。)

⑤最近、コーヒーとか、ジュースとかのような飲み物を飲む人が多くなってきた。

(例をあげて言う場合に使う。)

※この品物については、いいとか悪いとか、みんな違ったことを言っている。

(用言の場合は、二つを並べて、どちらかわからないという意味を表す。)

⑥参考書だの辞書だのがたくさんそろえてある。(たくさんあるもののうち一部分だけあげるという意味を表す。)

※きらいだの、すきだのと言わないで、なんでも食べなければいけません。

(用言の場合は主張を表す場合によく使う。)

では、なぜそんなにたくさんの手段を使って、並列関係を作っているのだろうか。各手段の使い分けをしっかりつかむことは

難しいと思うが、その主な区別について簡単に述べてみることにしよう。

- 私は { ①電話と電報(と)をよく利用します。
②電話とか電報とかというものはあまり使いません。
③電話や電報(など)をよく利用します。
④電話やら電報やら、いろんな通信道具を研究しています。
⑤電話だの電報だのいろんな通信道具を研究しています。

①「と」は事柄をはっきり列挙する場合使う。

②「とか」は耳にしたことのあるはっきりしない事柄を並べるのに使う。用言を並列させる場合は二つの事柄を並べて、どちらかわからないという意味を表す。

③「や」は列挙した事柄以外にまだあるという余音が現われる。

④「やら」も「そのほかにもまだある」という意味を表すが、たくさんあるがただ例を挙げるという気持を表す。

そのほか「のやら」の形で用言について反対の意味を表す言葉を並べて「どちらかわからない」という意味を表す。

あの人**は**来る**の**やら来ない**の**やらさっぱりわからない。

⑤「だの」はたくさんあるものの一部分だけをあげるという意味を表す。

結婚する子供のために、テレビ**だの**、冷蔵庫**だの**の買いそろえてやらなければならない。

用言の並列になると主張を表すことができる。

部屋代が高い**だの**、食事がまずい**だの**と文句ばかり言う。

接続助詞と慣用文型による並列はあとに述べることにする。

* 練習

1. 次の連語を中国語に訳しなさい。

素直な性質 皮肉な笑い 魚のたぐい
歴史の流れ 繰り返される商談 気乗りのしない
その場に居合わせたセールスマン

2. 例にならって次の名詞と動詞を使って目的語と述語の関係のある連語を作りなさい。

例:市場を操る

恩恵 過去 用 便益

振り返る もたらす 足す 与える

3. 下の説明に合うように次の語の中から適当なものを選んで括弧の中に入れなさい。

ビジネス デート 取り引き 生身 うちとける

触れあい たぐい 遣り取り 手がかり

セールスマン

(1)ものを取りかわすこと()

(2)同じ種類,仲間()

(3)物品の売買,またはそれに伴う金品の受け渡しを行うこと
()

(4)外交販売員()

(5)実業、事務、営業()

(6)互いに接触すること()

(7)生きているからだ()

(8)隔てなく仲よくつきあうこと()

(9)手を掛けるところ()

(10)日時を決めてあうこと。また、その約束()

4. 適当なことばを選んで_____のところに書きいれなさい。

物足りない むしろ ぬきにして 気乗り そのもの

手がかり いっこうに 操る ことなしに たぐい

居合わせる およそ

(1)一体何にかぎらず芸というものは遣っている中に知らず